

舞姫外伝「道化」

〔テーマ〕

- ・ 相沢から見た豊太郎
- ・ 本文中の相沢の心境

〔動機〕

正直、本文を読んだばかりの頃は、僕は相沢を酷い奴だとしか見ていなかった。逆に、豊太郎の事をあまり非難する気にはなれなかった。だから、本文と逆に、相沢の視点から「舞姫」を見直せば、より深い読みができるのではないかと思い、相沢視点の文章を書くことにした。本文をそのまま辿っていくには、相沢の出てくる場面が少なすぎると感じたので、外伝という形で新たに話を作ることにした。

〔本文の注意点～骨牌（トランプ）について～〕

- ・ 初めの場面で二人がやっているのは、ポーカーである。
- ・ ポーカーのルール上、道化（ジョーカー）は好きな数、マークとして扱うことができる。
- ・ 「二・二の組」は２ペア、「二・三の組」はフルハウスという役で、フルハウスの方が強い。

〔本文〕

「今の世はこの骨牌に似ている……そうは思わないか、豊太郎」

豊太郎と私が共に大学に通いし時、私は彼にこのように言ったことがあった。

「それはどういう意味だ、相沢」

彼は山から札を取りながら、私にそう問うた。

「人の扱いは、この遊戯における札の扱いと同じだということだ。札の価値がその持つ数で決められるように、人の価値も、その者が持つ力で決められる。そして、札を持つ者が、その札の力を評価し、必要であると判断すれば、その者を手札に残す。だが、もし力が無いと……要らないと判断されれば、その時は――」

札を見定めながらそう言うと、私は手中の札から要らぬ数枚を取り、ゆっくりと山の横へ捨てた。そして、有益な札が出ることを願いつつ、捨て札と同数の札を取り、手中の札の中に加えた。

「そして、後ろには多くの代わりが控えている。だからこそ、容易に捨てられ得るという訳か……なるほどな」

私の動作を見て彼は言った。私が頷いてみせると、彼も同じように、要らぬ札と山札を交

換した。そして、自分の札をしばし眺め、ふいに口を開く。

「だが、全く同じという訳ではあるまい。骨牌とは違い、我々に刻まれた数は不変のものではない。経験を積み、功績を立てれば、我々は札主の信頼を得て、己の数を上げてゆける。今、我々がどれほどの数を持つのかは知らぬが……今は学生の一人でしかない我々として、騎士にも王にもなることができよう」

淡々とそう言う彼からは、微塵の迷いも感じられなかった。功名心と自信に満ちたその言葉。全くもって彼らしいと、その時の私は思った。

「言うではないか。すでにこの大学の名誉ある騎士となりつつある君が」
私が少し皮肉を言ってやると、彼も「よせ」といって笑ってみせた。主席を取り続けてきた彼は、十九にして学士の称を受けるらしかった。それが真であれば、この大学始まって以来の名誉となることは間違いなかったのだ。

「さて、それではお互い札を明かそうか」
そう言って、私は手札を晒した。騎士が二人に王が二人の計二組。決して強き役では無いが、先ほどの彼の言葉もあった故に、顔には僅かに笑みが浮ぶ。

だが、その笑みは一瞬にして消え失せることとなった。その所以は彼の晒した手札にある。我のと同じく、そこには騎士と王が二人ずつ並ぶ。しかし、その間には卑しく笑う陰が一つ……それは――

「“道化”を混ぜた二・三の組か……」

「君は二・二の組……我の勝ちだな」

「どうやらそうらしい。道化に救われたな」

「氣にくわんか」

「ああ、氣にくわん。他の札になりすましているに過ぎぬ道化役者など……」

「そう言うな。これもこの遊戯の規則の一つだ。それに――」

そう言って、彼は手札を下に置いた。その手に道化だけを残して。そして、道化の笑みを写す面をこちらへ向けながら、彼は言葉を繋いだ。

「我は、これほど力があり、人に求められる札などないと思うがね」
その言葉に、私は少なからず違和感を覚えた。私にとって、彼は品行方正な人間。自分自身の数を持たず、常に自分を偽り続ける道化とは、似ても似つかぬ人間であるはずだった。だからこそ、彼が道化を求めることが不思議でならなかったのだ。

そして、十年近くが経った今、私たちはセイゴンの港を訪れていた。だが、あの時とは違い、彼は私の近くには居ない。私は皆と共にホテルに泊まっているが、彼は一人船に残っている。

あれから私は努力を重ねた。経験を積み、功績を立て、他の信頼を得て、遂に大臣の秘書官となった。順風満帆とまではいかずとも、私が歩む道はおおむね順調であった。

しかし、彼は変わってしまった。いや、本性が露わになった、とすべきであるのかもしれない。

数年前、彼は務めていた省の官長の命を受け伯林へと渡った。そして、そこで一人の貧しき踊り子と恋に落ちた。しかし、その関係を報告され、彼はその築き上げた地位を失った。私は彼を救ったが、彼は、失った地位と踊り子の愛に惑わされ続けた。

その後、私は大臣と共に伯林を訪れた際に彼に会った。その時の彼は迷いに満ちており、とても以前の彼だとは思えなかった。しかし、私はその時気づいたのだ。その弱き姿こそが、彼の本性であるということに。そして、おそらく彼も、その事に気づきだしていたのだろう。

彼の本性を知りはしたが、私は、彼がそのような弱き心からは早く脱することを願った。彼には学識も才能もある。それを生かしさえすれば、彼は再び地位を取り戻すことができるはずなのだ。

私は彼を救うべく動いた。出世の妨げとなるあの踊り子との縁を切るよう彼に忠告し、自ら大臣に進言し、彼の力を示す機会を作り、信用させた。しかし、その度に起こす彼の言動は、踊り子の時と同じく、その場に合わせて受動的に動いているに過ぎなかった。結果、私の行動は、彼の心をさらに惑わすこととなってしまった。

もう、彼に何を言っても仕方がない。彼が熱で倒れたあの日、そう考えた私は、彼を看病していたあの踊り子に、彼の言動の全てを話した。卑怯な手あったかもしれないが、それでも、彼が出世し、真の幸福を得るにはにはこうするしかなかったのだ。

結果として、私の目論見は成功した。踊り子の正気と、彼の心を犠牲にして……。

彼の心が癒える様子はなく、今も彼は船室にこもり、出てこようとしなない。おそらく自分を、そして私を責めているのだろう。

だが、私のした行為は、必ず彼を幸福へと導くはずなのだ。彼がそれに気づき、再びかつてのような彼に戻ってくれる事を、私は願っている。

部屋の窓から港の方を見ると、彼の残る船が見えた。その船を、否、そこにこもる彼を見据えながら、私は口を開いた。

「我が友、豊太郎よ。私はあの時、何故君が道化をあれほど評価したのか分からなかった……。だが、今なら分かる気がする。それは、君自身の本性が道化であるからだ。誰の手中にあらうとも、どのような札に混ざろうとも、決して捨てられぬよう振る舞った。君

は、私の友であろうとするのと同時に、あの踊り子の夫である

うと、そして大臣が信頼を置く人物であろうとした。まさしく、君は全ての札であろうとしたのだ。

君は言ったな、これほど力があり、人に望まれる札は無い、と。だが、自分がそれであると気づいた時、君はどう感じた。求めていた力はあったか。万人に望まれる存在であったか。

君の求めた道化の札は、君の真の姿、君自身の弱さの映し身でしかないのだ。君は何も欲してはいない。君は全てを恐れたのだ。私との縁、大臣の信頼、踊り子の愛……。手に入れた外物との繋がりが絶たれるのを。繋がりが絶たれ、自分が捨て札の山に埋もれることを……」

「君は……弱き道化でしかなかったのだ」

〔本文で注目したした部分とそこから読み取ったこと〕

- ・ P279 L7「余が免官の～通信員となし」
- ・ P283 L7「汝が名誉を～あるべきぞ」
- ・ P285 L1「彼が生路はおほむね平準なり」
- ・ P285 L3「同じ大学に～激賞したる」
- ・ P286 L5-14「彼は色を～決して断て」
- ・ P294 L16-P295 L1「さまざまの～とのたまふ」
- ・ P297 L7「大臣には病～繕ひおきしなり」
- ・ P297 L13-P298 L1「彼は相沢に～一諾を知り」

→相沢は昔、豊太郎と同じ大学に通っていて、その頃はまだ彼の行いを誉めていた。しかし、伯林で豊太郎と会ったときには、「弱き心」や「目的なき生活」、「人材を知りての恋にあらず」と、彼の言動を非難している。さらに、その直前、詳しい話を聞く前には、なかなか豊太郎を責めなかった。つまり、相沢の豊太郎に対する

見方が変わったのは、豊太郎から詳しい話を聞かされたときであるということが分かる。

また、見方が変わっても、豊太郎の実力は認めている事から、身分も教養も低いエリスとの恋は特に許せていないようである。

そして、相沢はひたすら、大臣にアピールしたり、エリスと別れさせようとしたりと、豊太郎の地位を取り戻させようと行動している。エリスとの生活を「目的なき生活」と表現している事からも、豊太郎が今の生活から抜け出し、再び功名心を持った生活を送るこ

とを望んでいるように思えた。

〔感想／反省点〕

読み取った相沢の性格をなんとか表すことができたと思う。オリジナルの部分も、本文の表現を元にしながら場面を設定することができた。しかし、本文に相沢についての表現が少なく、推測で書いた部分が多くなってしまったのも事実であり、それがとても残念だ。もっと教科書以外からも資料を探してくるべきだったと思う。